

序文

ジョセフ・シュンペーターの研究は、今日の研究者に依然として重要な役割を果たしている。例えばわれわれは、イノベーション、企業家精神、革新的寡占競争、定型化した循環フロー等々の彼の概念を使っている。われわれはまた、未だにほとんど解決されていない三つの主要な問題を指摘するのに彼の研究を使っている。第一に、彼の研究は、われわれが経済発展と資本主義の変容という大きな問題をまだ説得的な仕方で論じきっていないことを強調するために使われる。第二に、経済発展についての彼の分析的論じ方はやや不満足なものに止まったが、そのことは現代の道具を適用して彼の研究を展開する課題となっている。第三に、長期的な経済発展という大問題は個別の経済分析によって答えが与えられることはなさそうであり、それゆえ彼の研究は、われわれにさまざまな社会科学の間で体系的な共同体制を確立するというほとんど解決されていない問題に注意を向けさせる。

シュンペーターの研究は重要であるが、彼の多数の著書や論文が発展分析の視点から統合的に研究されるには至っていない。その代わりに、われわれは概して彼の多くの興味深い議論や目立った定式化のいくつかに焦点を当てている。われわれは、彼の革新的企業者という概念に魅了され、それを企業者の機能に

ついでに非常に異なる多くの概念のいくつかと比較することになるだろう。また、経済発展が停止に至る静態的経済という彼のモデルの正式な性格を研究することを望むだろう。あるいは、われわれは彼がインベーションと金融危機について述べたことを調べたいと思うだろう。だが、シュンペーターの発展理論の要素についてのこのようなことや他の多くの研究は、苛立たしさを募らせることになりそうだ。そのような研究のどれもがシュンペーターの発展のメカニズムの完全な分析であると主張しているが、シュンペーターに触発された個別の研究計画の中にはそのようなものはみられない。その結果、われわれは、彼の概念的枠組にまったく依存するか、この枠組を完全に否定するかの間を行ったり来たりすることになる。別の選択は、シュンペーターの個々の論文の共通の性格と経過をしっかりと研究することである。本書は、シュンペーターの研究への接近方法としてこの選択肢に賛成して企画されている。

シュンペーターの著作についての総合的な研究は容易ではない。もっともわかりきった問題は、彼が研究の中心的要素をドイツ語で述べたことだ。さらに彼は、経済学の境界や資本主義の運命に関する議論に関わったが、その議論は忘れられて久しく、それらは今日の読者には説明が必要だろう。労を惜しまず学ぶ利点は、シュンペーターが一九三〇年代と四〇年代に出版した有名な英語の本の理解が向上することだ。だが、彼の著作の統合的研究にはさらに準備が求められる。もっとも基本的な準備は、驚くほど難解な発展プロセスの分析をマスターすることだ。これをマスターすることは、しばしば困惑させられるシュンペーターの用語法だけでなく、シュンペーターが直面しなければならなかった難しさを理解するのに役

立つだろう。基本的な発展分析を把握できれば、なぜ彼が経済発展の理論を社会発展の一般理論で補完しようとしたかも明らかとなるだろう。

私が本書を書くに至った背景は、現代の発展経済学の概説を試みたことに遡る (Andersen, 1994)。ここで私は、シュンペーターとの「対話」が有益であると提案した。私は直ちにこの考えを発展させることを数度試みたが、それはジェスパール・ジェスパールセンがシュンペーターの発展理論についてのデンマーク語の小さな本 (Andersen, 2004a) を書くよう依頼するまでは具体化しなかった。その小さな本に書くのは、私の材料のごく一部であったのは明らかだ。そこで、私はより大きな本を英語で書く決意をした。この計画は膨らんで五〇〇ページの『シュンペーターの発展経済学』 (Andersen, 2009) となった。この本はシュンペーターの主要著作の構成と内容に忠実に従ったことから、おそらく参照文献として有益だが、複雑でいくぶん読みにくいものとなった。シュンペーター理論のより分かり易い解説書を書くためにはもっと自由度が必要だった。したがって、経済学の偉大な思想家シリーズの中の一書としてシュンペーターに関する本を執筆しようトニー・サーウエルから依頼を受けた時、私は喜んで引き受けた。その結果が本書である。シュンペーターの経済および社会の発展理論についての興味を引く分かり易い入門になっていれば幸いである。

目次

謝辞	iii
序文	vi
略記について	ix

第一章 はじめに…………… I

一・一 シュンペーターの発展理論の研究計画	I
一・二 シュンペーターの中心的著作	7
一・三 シュンペーターの基本的な発展モデル	17
一・四 本書の構成	23

第二章 出生から青年時代——一八八三—一九一三年…………… 29

二・一 旧体制オーストリアの中での上昇志向——誕生から大学入学前まで	29
二・二 ウィーン大学で経済学を志す	33
二・三 歴史学派と新古典派経済学	37
二・四 大学卒業後の研究と最初の本	47
二・五 初期の学問的経歴と二番目の著書	52

第三章 均衡経済学から発展経済学へ…………… 59

三・一 経済発展についての競合するアプローチ	59
------------------------	----

三・二	ワルラスの企業者とシュンペーターの企業者	65
三・三	景気循環の發展的機能	74
	第四章 企業者対経済システム ……………	85
四・一	S企業者の存在しない定型化された循環的な流れ	85
四・二	シュンペーターの企業者の機能	92
四・三	S企業者の特性	98
四・四	経済発展分析の枠組	106
	第五章 シュンペーターの標準的な例としての鉄道化 ……………	113
五・一	概念の説明	113
五・二	発展比較静学	122
五・三	予測不能性と発展のメカニズム	128
	第六章 幕間劇——一九一四—二五年 ……………	133
六・一	戦時の政治と研究	133
六・二	困難な戦後の再建	140
	第七章 社会発展の一般理論に向けて ……………	147
七・一	歴史学派と社会発展の理論	147
七・二	社会発展と合理性	154
七・三	社会発展の一般理論	163

第八章	経済学者の小さなメツカ——一九二五—三二年……………	175
八・一	ボン大学からの現代化	175
八・二	社会発展論者による次のメツカの追及	183
第九章	ハーバード大学教授と研究計画——一九三二—四二年……………	193
九・一	刺激を与えるハーバード大学教授	193
九・二	基本的だが未完成な研究計画	202
九・三	経済危機とケインズ主義	208
九・四	発展の波と資本主義の発展	214
第十章	発展の三部作とシュンペーターのモデル……………	227
十・一	発展の三部作	227
十・二	経済発展についてのシュンペーターのモデル	231
十・三	発展のメカニズムとシュンペーターのモデル	238
第十一章	資本主義のエンジンの基本的な働き……………	249
十一・一	資本主義のエンジンと経済発展	249
十一・二	経済発展の波の二つの段階	257
十一・三	企業者の群がりと適応による不況	265
十一・四	進化統計学とシュンペーターの波	274

第十二章 資本主義のエンジンの複雑な働き……………285

十二・一 経済発展の複雑性へのアプローチ

十二・二 発展の波の四つの局面

十二・三 発展論による診断、予測ならびに対処

299 291 285

第十三章 資本主義発展の経済史……………305

十三・一 波型発展への第三次接近

十三・二 資本主義プロセスについての筋の通った歴史

十三・三 イノベーションの普及と種類

323 313 305

第十四章 資本主義のエンジンの変容……………331

十四・一 発展のメカニズムの変容

十四・二 マークII概説

十四・三 寡占的競争と経済発展

十四・四 寡占的エンジンの機能

350 342 337 331

第十五章 資本主義のエンジンと長期的な社会発展……………357

十五・一 資本主義のエンジンのブレーキ

十五・二 発達する資本主義における部門間の共同発展

十五・三 後退する資本主義の部門間の共同発展

十五・四 グローバリゼーションと再び高まった資本主義の進歩

382 371 363 357

第十六章 晩年——一九四三—五〇年……………387

十六・一 シュンペーターの未完成性

十六・二 経済学の歴史の中に生きる

十六・三 シュンペーターの遺産

十六・四 シュンペーターの「最後の論文」

406 403 393 387

訳者あとがき……………415

参考文献

索引

1 17

13.3	マイナーな形態のイノベーションが加えられた場合の ロジスティック産業動学 (Andersen, 2009, 432 に基づく)	327
14.1	シュンペーターのマーク II モデルにおける既存企業の 2つのフィードバックの輪 (単純な労働版)	339
14.2	4企業がそれぞれ一定の異なる生産性を持つ場合の単純な 自己複製子動学	345
14.3	シュンペーターのマーク II モデルの単純な労働版における イノベーションに基づく成長 (Andersen, 2009, 290 に基づく)	348
15.1	資本主義の発展のエンジンの二つのブレーキ	360
15.2	発達する資本主義の時代における部門間の非対称的共同発展	367
15.3	後退する資本主義の時代における部門間の非対称的共同発展 (国家部門の発展が支配的となり、経済部門の発展が弱まる)	376
15.4	経済と科学の強力なグローバリゼーションによって 再現する発達する資本主義	383
16.1	経済学の科学的プロセスについてのシュンペーターの 理論体系 (出所: Andersen, 2009, 360)	401

目次

1.1	シュンペーターの中心的著作の間の基調的な関係。『発展』、『景気循環論』、『資本主義』は発展三部作と表現できる。	15
2.1	第一次世界大戦前のヨーロッパとシュンペーターの縁の場所 (出所 Andersen, 2009, 29; Ebbe Sloth Andersen による作図)	30
3.1	適応と革新の因果関係を持つ単純な経済発展 (S 企業者が定型業務を革新する一方、S 経営管理者は適応することを余儀なくされる)	73
3.2	シュンペーターの経済発展の図式	83
4.1	新たなシュンペーター的企業の設立——さらなる拡大の可能性を考えない場合	96
7.1	シュンペーターの発展理論の主な源と構成要素 (Andersen, 2009, 36 を修正)	148
7.2	適応と革新の因果関係を持つ社会生活部門の発展 (少数派が定型的生活を革新する一方、大衆は適応を余儀なくされる)	153
7.3	社会生活の発展の分析図式	171
10.1	#1 産業内の発展の基本的メカニズム (イノベーション、慣性、選択)、ならびに共同発展する #1.1 と #1.2 の 2つの産業への分離 (Andersen, 2009, 380 に基づく)	239
11.1	2 行程循環の資本主義のエンジン	254
11.2	経済発展を生み出す資本主義のエンジン	255
11.3	資本主義のエンジンによって生み出される 2局面の波 (Andersen 2009, 219 に基づく)	263
12.1	発展の波の 4局面 (出所: Andersen, 2009, 231)	295
12.2	4 行程の資本主義のエンジン (Andersen, 2009, 227)	297
13.1	シュンペーターの第三次接近の教育上の事例: 同時並行的な 3つのサインの波とそれらの合成効果 (S, 1939, 213, 1051 の定式化に従って描いた)	310
13.2	鉄道とコンドラチェフの波 (Andersen, 2009, 207, 431 に基づく)	321